

模擬試験を軸としたPDCAサイクルを構築し、プロセス評価を通じて学習意欲を喚起

愛知県立豊野高校ゆたかの

生徒に主体的な学習姿勢を身につけさせようと、愛知県立豊野高校は、模擬試験の事前・事後指導の改善に学校一丸となつて取り組んでいる。模擬試験の評価を学習改善に結びつけるために、学習プロセスを可視化。その学習プロセスを声かけの際にも重視し、生徒の学習意欲の向上につなげている。

模擬試験の活用を見直し、 主体的な学習姿勢を育む

愛知県立豊野高校は、2020年度から、主体的な学習姿勢の育成を目指し、模擬試験を軸とする学習のPDCAサイクルを生徒が回せるようになるための取り組みを始めた。教師は、各過程において生徒の様子を丁寧に見取り、学習意欲の向上につながる声かけを行っている。

それまでも、教師は生徒の希望進路の実現のために力を尽くしていたが、生徒の学習意欲を高める指導にはなっていなかったと、進路指導主事の谷口明正先生は、課題意識を次のように語る。

「宿題を大量に課し、未提出の生徒は放課後に残して取り組ませる指導を行っていました。生徒は宿題をこなすのに精いっぱい、内容の理解は伴っていないのでしよう。学力はなかなか向上せず、生徒の学習姿勢は受け身になる一方でした。指導方針の転換が必要だと考えるようになりました」

そこで、谷口先生は、進路指導の3年間の流れがひと目で分かる形に、進路指導の方針を1枚の紙にまとめた。「生徒が行けるところを探す進路選択」ではなく、「自分の夢から一番近い進路選択」ができる学校」を目指す学校像に掲げ、その実現のために、各学年で重要な観点、

時期ごとに重点を置くべき指導、主要アセスメントとそれをういた声かけ例を示した。それを教師間で共有するため、20年2月、希望者を募って研修会を実施した。

「若手を中心に約30人の教師が集まり、生徒を何とか伸ばしたいという意欲を感じました。進路指導主事として、私は本校の進路指導の方針を明確に伝え切れていなかったと反省しました」（谷口先生）

生徒の学習姿勢の改善の軸にしようとして着目したのが、模擬試験だ。各学年で複数回実施していたが、事前・事後の学習は生徒に任せていた。そこで、LHRで模擬試験に向けた目標得点の設定や学習計画の立案、振

り返りを行い、生徒が学習のPDCAサイクルを回せるようになるための支援策を模索した。

「本校の卒業生の進路は、大学進学が6割、専門学校進学が3割、就職が1割ですが、入学時に卒業後のビジョンを明確に持つ生徒は多くありません。自身の将来を見いだすための1つの基準となる『学力』に向き合わせ、将来を見据えて、学習に取り組む姿勢を身につけさせることを目指しました」（谷口先生）

学習状況を自己分析し、 模擬試験の目標得点を設定

6月中旬、7月の模擬試験に向け

て、生徒が自身の目標得点の設定と学習計画の立案に取り組み事前指導を行った。目標得点設定には、「合格ライン」(*)を活用。また、学習計画表の作成には、事後指導で計画の実施状況を振り返らせて生徒の



進路指導主事
谷口明正
たにぐち・あきまさ
教職歴14年。同校に赴任して10年目。数学科。



1学年主任
平野大地
ひらの・だいち
教職歴5年。同校に赴任して6年目。英語科。



1学年担任
足立祥太
あだち・しょうた
教職歴8年。同校に赴任して1年目。数学科。

愛知県立豊野高校

◎校訓は「真心」。学校教育目標を「社会をたくましく生き抜く人間」とし、その達成に向け、社会を見据えるキャリア教育に重点を置く。「総合的な探究の時間」にSDGsを切り口とした探究学習や、豊田市や地元企業と連携した社会人と生徒の交流プログラム「ジョブカフェ」などを行った。

- ◎設立 1986(昭和61)年
- ◎形態 全日制/普通科/共学
- ◎生徒数 1学年約320人
- ◎2020年度入試合格実績(現浪計) 国立大は、岐阜大、名古屋工業大、公立鳥取環境大に4人が合格。私立大は、東京理科大、愛知大、中京大、名城大、近畿大などに延べ344人が合格。
- ◎URL <https://yutakano-haichi-ced.jp>

図1 1年生の「自己分析・学習計画表」

模擬試験の前に、学習事項の到達度を自己分析。受験後の自己採点を踏まえて、同じ項目について事後評価を行い、その差異に注目させる。 *学校資料をそのまま掲載。

メタ認知能力を向上させることと、教師が模擬試験の結果だけでなく、学習プロセスに基づいた声かけをできるようにするねらいもあった。谷口先生は、学習プロセスを評価する意義を次のように語る。

「面談で、模擬試験の成績が伸び悩んでいた生徒に、『今まで頑張ってきたノートや取り組みをまとめてきたノートや取り組みをプリントを持っておいで』と声をかけると、10冊以上のノートを持ってきた生徒もいました。そうして生徒の努力を再確認するとともに、教科担当としてアドバイスをすると、悲

痛な面持ちだった生徒が自信に満ち溢れた顔になっていきました。模擬試験の結果だけを見てアドバイスをするのではなく、学習プロセスを評価する大切さを実感したことから、生徒の学習状況を見取る材料として学習計画表を大事にしています」

1年次の事前指導では、国語・数学・英語の各教科担当が模擬試験までにすべき学習項目を一覧化したプリントを配布(図1)。生徒は、各学習項目を3段階で自己分析した上で学習計画を立てた。受験後は、自己採点と、改めて各学習項目を事後評価し、今後強化すべき分野を挙げて、次の模擬試験の目標を立てた。その一連の活動によって、生徒の学習プロセスを見取る仕組みができたこと、1学年主任の平野大地先生は語る。

「本校の生徒にとって、『教師に見守られている』という実感を持てるのが、学習意欲の喚起につながっています。生徒が最初に書いた学習計画の多くは、漠然とした内容だったため、対策が必要な分野や取り組むべき問題集などを具体的に書けるように支援し、少しでも計画を具体化することができた生徒は褒めようと、学年団で目線合わせをしました」

* 各大学に合格した生徒の進研模試における平均偏差値と平均得点。豊野高校では、同校から進学が想定される東海・中部地区の大学・学部をピックアップして、学問系統別に目標得点を一覧化。それらを記載した進路便りを生徒に配布している。

保護者の協力の下、生徒を支援する雰囲気を三者面談で醸成

8月の三者面談では、7月の模擬試験の自己分析を踏まえた、次回の模擬試験に向けての目標と学習計画を、生徒が保護者にプレゼンテーションする場を設けた。教師と保護者は、①それぞれの考えの違いを受け入れて楽しむ、②生徒の発言やアクションを保護者・担任は支援する、③失敗を歓迎する、④全体を否定しない(否定は代替案とセットで)、⑤伝えることを諦めないというルールをあらかじめ共有し、生徒が「発表してよかった」と思えるような環境づくりに配慮した。1学年担任の足立祥太先生は、その意義をこう語る。

「今回の模擬試験の結果が芳しくなかった生徒でも、次回に向けた自分なりの決意が認められれば、それを実行しようという意欲が湧いてくるのだと思います。保護者にとって子どもの思いを知る場となり、家庭も含めて生徒を支援する雰囲気を醸成することができました」

2年生では、7月の模擬試験の成績表を返却する際に、事後指導を実施。事前学習や自己採点、成績結果

図2 模擬試験の成績表返却時に行った振り返りプリント

*学校資料を基に編集部で作成。

などを踏まえて次の模擬試験の目標点を設定し、その達成に向けた学習内容を具体化する活動を実施するとともに、学年団から進路指導部により、各教科担当による模擬試験の振り返りのポイントの解説を生徒に向けて行いたいという提案があった。

「各教科担当が生徒の弱点を踏まえた振り返りのポイントをまとめたプリント(図2)を生徒に配布しました。自分たちをよく知る教師からの指摘を、生徒は自分事として受け止めていました。一方、学年団は、自分たちが提案したという当事者意識

から、意欲的に事後指導に取り組みました。学年団から新たな提案がなされることに、学校としての組織力の向上を感じます(谷口先生)」。なお、学年会では、各教科担当から模擬試験の結果分析と今後の指導方針を説明。担任が担当外の教科の状況についても把握し、生徒にアドバイスできるようにしている。

努力も課題も見えやすくなり声かけの内容が多様

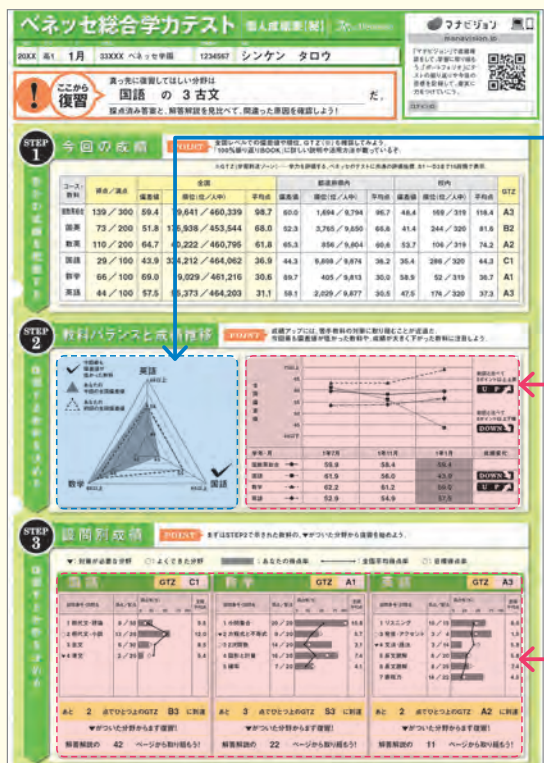
一連の取り組みによって、生徒一

人ひとりの学習プロセスを見取りやすくなったことで、模擬試験の個人成績表を生徒が振り返る際にも、教師は学習姿勢の改善につながるような声かけを行いやすくなった(図3)。例えば、国語が得点できていないにもかかわらず、国語の各分野の自己評価が高かった生徒がいた。その矛盾を担任が指摘すると、生徒は初めて現実と自己評価のずれに気づき、学習の見直しにつながった。的確な振り返りができるように、以前から生徒が学習プロセスに注目できるよう意識した面談をしてきたという足立先生は、次のように語る。

「面談では、『なぜ、その結果になったのか』と生徒に問いかけ、自身の言葉でその原因を語らせ、結果に至るまでのプロセスを生徒と共有しています。そこから継続すべき学習行動と改善すべき学習行動を見いだせるように、さらに生徒自身を考えさせたり、アドバイスをしたりしています」

谷口先生は、「はい・いいえ」で答えられるような質問は避け、また、信頼関係がまだ構築できていない生徒には、「なぜ」と問いかけすぎないように留意している。そして、生

図3 模擬試験の成績表を活用した生徒への声かけの具体例



- 効果的な声かけ
- 生徒の学習意欲を削ぐ声かけ

苦手教科は生徒自身が十分認識している。「国語が苦手だね」というような、「はい」としか答えられないことに言及するのは、生徒の学習意欲を削ぐ。

得点の推移を見て、上がってれば、「ほかの生徒にも教えたいから、どんな勉強をしているのかを教えてください」というように努力を認める。一方、下がっている場合には、「これまでよかった教科の成績が下がってしまうほど、別の教科に集中して取り組んでいたの?」というように、生徒自身が学習状況を振り返られるような声かけをする。

生徒が弱点分野を認識しているかを確認。「これまでの勉強法を確認しよう」と、学習計画表を基に学習プロセスを振り返るように促す。さらに、今後どう改善するのかを掘り下げて聞き、「家に帰ったら1問でも取り組んでみようか」などと、具体的な行動に導く。

*「効果的な声かけ」は、「1年生 ベネッセ総合学力テスト 個人成績表」(見本)を用いて、豊野高校の教師が行っている例を記載。

生徒が発言するまで待つことを大事にしていると言う。

「苦手分野を聞いても、生徒がなかなか答えなから教師が指摘してしまう」ということは、よくあると思います。しかし、生徒の顔を見て、考えている様子が分かったら、私は生徒から言葉が出るまで待ちます。

生徒から言葉として苦手分野が出てきたら、『家に帰ったら1問でもやってみようか』と声をかけるのです。そして、生徒が実際に取り組んできたらすぐに褒める。これからの教師には、そうしたコーチングの姿勢が求められると感じています」

プロセスを認め、生徒との信頼関係

今後は、生徒の学習方法や答案の中からよい例を提示し、生徒間で共有するなど、生徒同士が刺激を与え合う機会をつくることも検討中だ。

「模擬試験の振り返りでは、それまでの本校では見られなかった、生徒同士が答案を見せ合って、記述式の問題について話す姿が見られました。一連の取り組みを通じて、誰にも見せたくないはずの模擬試験の結果が、自分が成長するための材料に変わったのです。その様子を見て、

生徒の変容を受けて 指導改善への意欲が高まる

係を築くことは入試にもつながると、平野先生は実感している。

「志望校の最初の入試日程で不合格となり落ち込んでいた生徒に、それまでの模擬試験の成績が徐々に上がっていたことを指摘し、『努力して結果も出ているのだから、最後まで頑張り抜くことが大事だ』といった言葉を投げかけました。すると、その生徒は、次の日程で合格しました。入試直前にだけそのような声かけをしても効果は薄く、大事なものは低学年からの日頃の声かけです」

「生徒は様々な評価を受けますが、それを学習行動の改善に生かせるような教師の支援が必要です。振り返りの際に、ポートフォリオなどの記録は、自身の成長に気づく重要な材料となります。そこから生徒の努力を見取り、声かけを行うと、『実は、こんな学習をしています』と自信がなさそうに話してくれる生徒もいます。そうした小さな声も丁寧に拾い、生徒の学習意欲を喚起する機運をさらに校内で高めていきたいと思います」

本校の生徒も切磋琢磨して伸びていけると確信しました。生徒に任せれば失敗することもあります。それが糧となり、その後の学習姿勢に良い影響があると思っています」(谷口先生)

生徒の変容を受けて、同校の教師たちも指導改善への意欲が高まっている。授業の最後に振り返りを行い、コメントをつけて返却する取り組みを始めた教師もいる。振り返りを生徒の成長の機会と捉え、そこで行われている評価の工夫を校内で共有し、さらなる指導改善の活性化を図るのが自分の役目だと、谷口先生は語る。